『シエスタ』1995年春号、
（株）ジェイ・エム・エス、
1995年4月、pp.7-9.

永井荷風から現代の若い女の子まで、なぜ日本人はかくもパリが好きなのか？
その謎の一端を解き明かす著書『異都憧憬 日本人のパリ』で、
サントリー学芸賞を受賞なさった今橋映子さんに、
日本人をとりこにしてきたパリ神話の研究者として、また街歩きの好きな若い女性の一人として、
ちょっと違った視線から見たパリについて話していただきました。

Travel Memoir

トラベル・メモワール⑤

運命の女（ファム・ファタル） パリの魔力にご用心

今橋 映子

日本人のパリ恋いは明治以来の長わずらい

「日本人のパリ」というテーマに取り組んだきっかけは？

日本とフランスとの関係についての研究をやりたいとずっと思っていたのですが、どこにテーマをしぼるかがなかなか決まらなかったんです。それに研究している私自身が、やればやるほどフランス文化が「わかった！」という感じになれないので、いっそやめてしまおうかと思ったほどでした。そんなときにふと、永井荷風の昔から今に至るまで、なぜ日本人はこんなにパリに憧れるんだろう、あんなに人も文化も違うのに……と思ったんです。そうしたら、あ、そうか、そういう視点があるじゃないかとひらめいて、それから少しずつ調べ始めたんです。

本当に考えてみれば不思議です。どうして日本人は、こんなにパリが好きなんですか？

歴史的背景から言いますと、日本の近代化にとってのモデル国家はイギリスとドイツなんです。これはなぜかというと、実はフランスは江戸幕府と関係が深かったということがひとつ。加えて、1870年の普仏戦争でフランスはドイツに負けてますから、明治政府としては負けた国を国家の手本にするわけにはいかない。というわけで政治・経済などのハード面はイギリス、ドイツに学び、フランスに向ける視線は、特に芸術や文化の側面に集中した。つまり、フランスの最もいい面、美しい顔だけを明治以来見てきたんですね、日本人は。

「花の都パリ」というのは、日本人の幻想なのでしょうか。

いいえ。ヨーロッパ文明の華に当たる部分がパリにあるというのは確かです。パリある

いはフランスに憧れてやってくる外国人というのは、日本人だけじゃないんです。19世紀にはイギリス人、ロシア人がどんどん来ていますし、20世紀になってもアメリカ人がやはりひきつけられていきますね。それだけの魅力が確かにあるんです。ただ、日本人ほど長い間ずっと憧れ続けている人種はいないんじゃないでしょうか？

エトランジェをひきつける パリの手練手管

おっしゃるようにピカソやヘミングウェイたちもパリで暮らして作品を生み出していることが、パリをますます神話の街にしていますが、なぜパリは外国人をこんなにもひきつけてきたのでしょう？

パリ、というかフランスは自分たちの芸術を肥やすためには外国人を受け入れるところなんです。自分たちの生活に影を落とすのでない限りは、誰が何をしようと気にしない。ボヘミアンが自由に息をつける、そういう空気がすでに19世紀からあります。それに、モンマルトルとかノートルダム、エッフェル塔、ムーラン・ルージなど観光名所を美しく保全して、観光客をひきつける観光都市としての戦略ができている。エトランジェを魅了する仕掛けに満ちているといいましょうか、自分で自分の神話を作っている街なんです。その半面この10年来問題となっているように、移民労働者を排斥する動きなどはとても厳しいものがあります。優しく受け入れてくれるように見えて、そうでもないんです。ですから、きれいな顔にひかれて中に入ろうとすると、ひどい目にあう。作家の金子光晴は、1930年代にこの街に居て、パリは男をひきずりこんでズタズタにする女だとも言っています。

悪女なんですね。

ええ。ファム・ファタル（＝運命の女）という言葉がフランス語にはあるんですが、パリがそういう女にたとえられるのは昔からのことなんです。ところが、今ひきずりこまれてズタズタにされているのは日本人の若い男女なんですね。〈パリ症候群〉って、ご存じですか？

そんなのがあるんですか？

ええ。日本人の精神科のお医者さんが症例研究して本を書いてらっしゃるんですが（大田博昭『パリ症候群』トラベルジャーナル）、この本の中の例によれば、ちょっとフランス語のできる若い女性が、OLをしててもつまらないし、パリに行けば料理やモードの世界で力を発揮できるんじゃないかとパリへ行く。あるいは若い男性が、パリでだったらとびきりの彼女が見つかるだろうと期待する。でも現実はどうにもならなくて病気になってしまい「帰りなさい」と言われても帰れない。

バブルの頃に、ニューヨークに留学するOLがたくさんいたようなものですか？

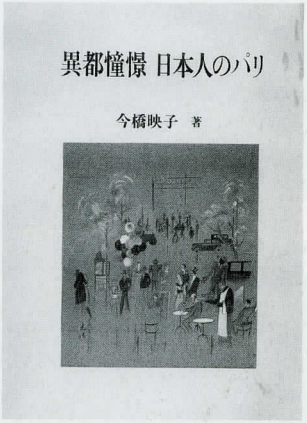
ちょっと違うらしいんです。ニューヨークでもロンドンでもこうはひどくならない。パリで特に起きている症候群なんだそうです。

パリの魔力のなせるわざ？

「今、ここにない自分」を求めてパリを選ぶ理由はその魔力のせいかもしれませんが、パリ症候群にかかってしまうのは当人の問題も大きいと考えられています。この症候群の第一段階は、「ああパリってなんてステキなんだろう」の大感激。でも、フランス人って愛想よくないですし、英語ができる人が少ないですから、日本人にはすごく冷たく感じられるんです。それで「フランスは大好き、フランス人大嫌い」になる、これが第二段階。さらに悪化するとフランスは全部嫌いになる。でもそういう感情的なことではなくて、どの国にもいいところ悪いところがあると相対的に見ることができれば、こんな病気にはかからないんじゃないかと思います。それに、日本人としてのアイデンティティをしっかり踏まえないまま、異国に何かを求めても何もみつからないと思います。

——あなたはまだ、パリーをご存じないのねえ。
パリーは、お化粧箱のやうにごたごたとよごれてゐて、
それで人をひきつけるのよ。
パリーはあそぶとこ、恋愛したり忘れたりするところ。
あなたみたいに生まじめにふさぎこんでばかりゐたってしかたがないぢやないの？

金子光晴『龍』より



『異都憧憬　日本人のパリ』（柏書房/1993年）
〝「同化なき共存」に向けて、ますます統合化のすすむ、現在の「多民族国家」フランスにおいて、今後日本人の旅行者、芸術家、知識人たちが、いかなる地位を占め、また彼らがそこに何を求めるのか——それはまだわからない。しかし1862年以来の「日本人の」パリについての歴史的探究が、何よりも異文化接触、異文化理解とは何かを解く糸口であることを知る時、私はその視点から、今後とも個々の人間、個々の作品について、研究を進めていきたいと思う。〟

ヨーロッパの図書館は、私の夢の国

今橋さんは、日本人の自分というものがまずあって、そして異文化との距離というか関係性を研究するというスタンスがありますね。そういう今橋さんは、どんな旅をなさるのでしょう。

観光地を短期間で回るという体力がないので、ひとつの街に1カ月くらいいる滞在型です。でもどこにいっても結局、図書館に入りびたってしまいますね。ヨーロッパの図書館は日本と違って、古い建物の中に写本から始まる本がズラッと並んでいて美術館の趣きがあるんです。私にとっては、もう夢の国。いるだけで幸せになってしまう(笑)。

今橋さんご自身のパリ体験は?

1983年、大学4年のときにパリとグルノーブルとアンジェにそれぞれ1カ月ずつ滞在したのが最初です。それから、1年間の留学も含めて何度か行っていますが、行く前も今も、特別な思い入れというのは実はないんですよ。ただ、東京っ子の私には何といっても都会だという点で、かえって小さな街より安らげるんです。料理が好きなので、おいしい食材が手に入るというのは大きなポイント(笑)。でも、どうしても相容れない、私たちと彼らとの文化の違いがある。それを幾度も自分の中で確認する場所ですね。私にとってのパリは。

パリの手練手管ではオチナイ?

『日本人のパリ』で扱った芸術家たちの中では、金子光晴のパリの手管を笑い飛ばす反骨精神に一番共感しましたから、そのつもりなんですけど(笑)。ただ、やはり現代の人間ですから、永井荷風や島崎藤村のような「遠い国」「別の国」という感じではもうないですね。面白い、居心地のいい場所です。東京よりコンパクトな歩くために作られた街で、古い路地がたくさん残っているんです。そんな狭い路地から路地を巡っていると、いろんなインスピレーションがわいてきます。だから、パリの地理はもうすっかり頭の中に入っている。今となっては、「第二の故郷」と思っています(笑)。

今橋映子(いまはし・えいこ)

1961年東京都生まれ。学習院大学文学部フランス文学科卒業。東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化博士課程修了(学術博士号取得)。この間パリ第四大学比較文学専攻博士課程留学、D.E.A.取得。日本学術振興会特別研究員を経て現在筑波大学文芸・言語学系専任講師。94年に『異都憧憬』で渋沢・クローデル特別賞、サントリー学芸賞受賞。

著書に『異都憧憬　日本人のパリ』(柏書房)、共著に『文明としての徳川日本』(中央公論社)『ヴィジョンの比較文化－滅び・異郷』(思文閣出版)がある。

リュクサンブール公園の春。(1990年)

今橋さんの「とっておきのパリ」は?

セーヌ通りというサンジェルマン・デ・プレの中にある古い通り。ここは画廊とお菓子屋さんと古本屋という、私の好きなものが並んでいまして(笑)。それからやっぱり、国立図書館とパリ市歴史図書館。みなさん、あまりご存じないと思いますけど、パリ市歴史図書館は貴族の館をそのまま使っていて、古いパリの地図や写真がたくさんあって、素敵ですよ。「おすすめ」です。

今、パリ以外で興味を持っている場所がありますか?

そうですね…オランダです。美術への興味と、日蘭交易の相手国として。

そう言えば、オランダも日本とは歴史的ご縁が深い。

ええ。本当に日本とヨーロッパの関係には長い歴史があるんです。でも、日本の態度は特に戦後、「アメリカ・アズ・ナンバーワン」になったり「ジャパン・アズ・ナンバーワン」になったり、フラフラしている。もうヨーロッパから何も学ぶべきことはないと思われるかもしれませんが、そうでもありません。ヨーロッパは、歴史の中で何度も自分たちの文化体系を自己批判しては作り直す作業をくり返して成熟してきました。この姿勢こそ、日本は学ぶべきだと思いますよ。

シエスタ春号 1995年春号
1995年4月1日発行 発行／株式会社ジェイ・エム・エス

地球の昼休み

○エゾモモンガ：ネズミ目、リス科

日本に二種類分布するモモンガのうち、北海道とアジア大陸に広く棲息するタイリクモモンガの亜種名がエゾモモンガです。体に似合わぬ大きな愛らしい目とふさふさしたシッポ。完全な樹上生活者でムササビ同様、体側に発達した皮膜を広げて木から木へグライダーのように滑空しながら数十メートルも移動します。体長は尾を入れても30cm弱、体重約100グラム。ネコほどの大きさのムササビと比べてエゾモモンガはリス程度の大きさしかありませんが、飛ぶ能力ではほとんどひけを取りません。昼間は眠り、夜になると元気に動き回って、トドマツの葉や樹皮、クヌギ、ナラ、コメツガの葉のほか、まれに昆虫も食べることが確認されています。住みかは木のうろやキツツキの古巣をちゃっかり再利用することも。持ちつ持たれつ、自然界ではすべての生物がかかわり合いを持ちながら暮らしているのです。

JMS
株式会社 ジェイ・エム・エス
本社　広島市中区加古町12番17号
TEL(082)243-5844

Siesta

1995 Spring
シエスタ
春号

特集「文学に憩う」
岡山・奥津温泉

トラベル・メモワール
パリの神話・今橋 映子

ツキノワグマを追う・米田 一彦

ミステリーの食卓

シリーズ「花のある風景」●富山県砺波市のチューリップ畑